福田正夫詩受容の変遷

工藤　茂

『井上靖エッセイ全集』（学研）を見ると、井上靖は詩人福田正夫について、二つの文章を書いている。一つは『主婦の友』連載「忘れえぬ人々」の「詩人福田正夫のこと」、もう一つは「詩人・福田正夫氏」。後者は、小田原市立図書館編『福田正夫－追想と資料－』のために書いた文章である。初出は「福田さんのこと」と題されていたが、『六人の作家』（河出書房新社）に収められた時には「詩人福田正夫」に改められ、エッセイ全集に収められた時に前記の題名となった。

両者には、ほぼ似たような内容が述べられている。そこで、後者の初出の文章から、この稿に必要な部分を引用してみたい。

その日、私は氏の家で氏自身が握ってくれたすしをご馳走になった。夫人も心から気持ちよく歓待してくれ、酒もご馳走になった。氏にとって私は、少額の同人費を送ったというだけの、どこの馬の骨とも判らぬ訪問者であるにすぎなかった。それなのに氏は、私が詩を書く、あるいは詩を書こうとしている青年であるということだけで、あるいはまた自分のやっている詩誌の同人になりたくて、同人費を送って来たというだけのことで、ただそれだけのことで、私を信用し、何年も前からの知己であるかのように遇してくれたのである。

この一事でも判るように、氏は全く無防備、無警戒で、徹低（ママ）した善意の詩人であった。誰に対してもざっくばらんであり、人を疑うことを知（ママ）なかった。

そうした氏を中心にして、月に一回「焔」の同人の会が氏のお宅で開かれた。十二、三人の若い詩人たちが集まった。いつも氏がすしを握った。私たちは少しも遠慮しなかった。飲みたいだけ飲み、食べたいだけ食べた。南条蘆夫、林鼎、中村道、加藤丘之助、能登秀夫といった人たちが居た。奥さん初め家の人たちは、さぞ大変であったろうと思うが、氏も私たちも、いっこうにそんなことには頓着しなかった。

ここには、いかにも大らかな福田の性格が見事に描かれ、「焔」の主だった同人たちが紹介されている。さらに井上はそれに続けて以下のように書いている。

私は文学というものに心惹かれた最初の頃、詩人福田正夫氏に面識を得、その家に出入りすることができたことは、自分にとって大きい幸運であったと思う。

氏は戦後亡くなられた。私が作家として仕事をしだして間もない時のことで、戦争中ずっとお遇いしていなかったので、一度お訪ねしようと思っているうちに、氏の訃報に接した。私がこの人

生で為した取り返しのつかぬ幾つかのことの一つである。

私が今まで知っている最もあたたかい歓待は、この善意の詩人の家で受けたものであり、最もたのしい雰囲気の会食は、氏のお宅で開かれた「焔」の同人会の食事であったと思う。私は今も詩を書いているが、これは全く「焔」の同人になったためである。

この最後の一文は、どういう訳か『六人の作家』に収められた時には削除されていた。あるいは、あまりにも詩人福田にこびた文意となることを、恐れたためかもしれない。だが、エッセイ全集に収められた時には、また復活してそのままになった。前者の『主婦の友』に掲載された「詩人福田正夫のこと」も、同じ《私はいまも詩を書いているが、これは全く「焔」の同人になったためである。》という一文で締め括られている。こういった意味において福田正夫は、室生犀星、萩原朔太郎、佐藤春夫、伊藤静雄、安西冬衛、三好達治とともに、詩人井上靖にとって重要な詩人なのである。

石垣りんが「心を打った男たち」[1]に《福田正夫を追想する人々が、その作品について語るより人間を語ることが多いのを、私は師にとって不名誉と思っていない。まだ肩上げもとれない少女を相手にしてさえ、どれほどの情熱をこめ、詩について語ったか。》と書いている。井上の先の文章もまた《その作品について語るより人間を語》ったものであった。ここに福田正夫詩の置かれている微妙な立場がある。しかしその評価が、五十年百年で確立されるとは思えない。そこで私は、福田正夫の詩が、これまでどのように批評され、文学全集などにどのように受容されてきたのかを、できるだけ客観的にたどってみようと思う。

一

西条八十の娘西条嫩子が、かつての父の呟きを次のように書きつけている。

「僕はいまも尚、フランス、ベルギー、ヨーロッパの詩が殆んどそうあるように韻律をもたらすパルナシャン的作品を念じつづけていた折り、福田正夫氏、白鳥省吾氏などのいわゆる現実派、生活派の傾向が強くなり、やがて沈黙をもせざるをえなくなった。その焦燥が、或いは歌う詩に駆りたてられる素因ともなったのかもしれない――」と。[2]

日本近代詩の歴史は、ある意味では言葉との闘争の歴史であった。言文一致というよりは、口語の文章体を獲得するための。大正五年一月、口語自由詩集『農民の言葉』（南郊堂書店刊）を上梓して詩壇に登場した福田正夫は、大正七年一月、詩誌『民衆』を創刊、後この詩誌によった詩人たちは民衆詩派と呼ばれるようになった。口語自由詩の新鮮なスタイルは、他の詩人たちを大いに驚嘆させ、刺激したのであろう。先に引用した西条八十の呟きには、それが端的に現れている。同時にこのような動きには、他の詩人たちの厳しい批評の矢が向けられた。たとえば日夏耿之介の『明治大正詩史』[3]、これは後年（昭和二十三年に）出版されたものだけれども、そこには以下のような批評が見えている。

《民衆派が口語を宗とする俗解を念とする立場から見ても至当だが、その口語使用は決して真正の意味で詩的ではなかった。》

《福田、百田に欠くる処のものは知識や思索は云ふ迄もないが、第一に詩を感じる時に就いての選択である。即ち、詩の第一章第一節の要義である。》

以上は頭注よりの抜粋である。以下本文からも抜粋してみよう。

福田正夫、百田宗治は前述の如く簡単な思想感情を簡単に表現するにとどまり省吾よりも低く鑑賞せられてゐるが、大正七八年より現在に及んで詩に進歩の跡が見えないけれど、純情は省吾よりも少しは多く持ち合せてゐる。努めて初心者の謙虚を失はずんば、まだ青年のこと故、詩家の極小なるものたり得ない事もなからう。

いつもこの岸から
希望のかの岸を望んで、
福田一（「光れる岸」）

の如き無反省な語句

おゝ近代人の悲哀よ、
同一（「緑の潮」）

の如き花外調が簡単な感想を示し

相鬩ぎ合ふこの地上の階級と階級の戦ひを
同一（「五月祭の朝」）

の如き言葉の無自覚な使用の夥しいのは、この二人である。

（前略）福田正夫は無思慮に言葉を訊ねる処白鳥と同じで、この通弊が民衆派を民衆から軽蔑させる根本動因となったことを遂に悟らなかった。（中略）（百田宗治は）福田と共に典型的凡庸群小詩人の一人であった。

日夏はこの著で、他の詩人に対してもこの調子で批評している。したがって、特に福田を悪意をもって批評したとは思われない。ただその功罪の、功についても客観的に述べるべきであったろう。

北原白秋もまた、福田の詩を批判した。大正十一年に書かれた「叙事詩であるか」「粗雑なる表現の一例」「散文が詩といへるか」「追記」「よいもの拾うた」などが『白秋全集18』（昭60・岩波書店）に収められているのでそれを見ると、福田の長編叙事詩「恋の彷徨者」は散文であって詩でないこと、言葉が作者によって殺されてしまっていることを指摘している。

私は「粗雑なる表現の一例」として、同君（福田正夫）の「天地に燃える太陽のごとく」云々の詩を、その言葉について仔細に一字一句より全体に亘って解剖批判した。さうしてそれが如何に生命なく、真のリズムなく、粗雑なる表現であるか、言葉の無理な跳躍、誇張、混乱、不整斉があるかを一々具体的に闡明し、更に詩の表現は詩人たる者の決して等閑にすべきでない事、言葉は尊重すべく、対するに極めて謙譲なるべきを説き、真の表現を生むその根本は、要するにその人、その心境、その真純なる態度にあることを断じた。

右は「追記」に見える文章である。ここでは福田の詩作におけることばの選択に、その批判が集中している。日夏や白秋の福田の詩への不満は実にここにあった。これは裏返せば、口語による自由詩の制作の困難さを示すものであった。と同時に、口語自由詩へと傾いていく詩人たちへの警告でもあった。

一方、中村星湖は『早稲田文学』（大正五年二月号）で、次のように福田の口語自由詩を評価した。

（前略）今度の詩集『農民の言葉』は、その標題が示す通り、田舎の百姓達の方言を基儘（ママ）に使ふとまでには行ってゐないけれども、都会の人にも田舎の人にも極わづかな文字さへあれば作者の歌は

うとした心持が楽々と入って行くやうな言葉使ひがしてあった。即ち用語が非常に謙遜に平易になったといふ点で私はまづ福田君の或自覚を察する事が出来た。[4]

前に掲げた日夏や白秋の批判よりも、むしろ右のような評価が、当時の大勢を占めていたことは、先の西条八十の呟きによっても知られよう。

さて、戦後（昭和二十六年）詩人伊藤信吉は「『民衆派』と詩壇の十年」[5]において、民衆派の文学について、次のように書いた。

≪民衆派の詩人はその文学的方法として口語自由詩をとったが、これは詩壇における自然主義を意味するものであった。≫ ≪ひさしく詩壇の主流をなしていた象徴詩とその観念的な美の意識は、やがてなんらかのあたらしい運動で変革されねばならない。ここに民衆派はひとつの強力なアンチ・テーゼとして提起され、文学作品を生活的現実のなかへ解き放し、部分的には社会的現実に触れようとした。≫ ≪（前略）積極的な態度で従来の美の意識から脱出し、詩を生活のなかに導いたことは何としても民衆派の功績であった。≫ ≪民衆派の文学の内容と価値は、その民衆という言葉に含まれる意味―文学的には詩的自然主義であり、思想的にはデモクラチックであるという、そのこと以上でも以下でもない。≫ ≪当時の文壇には人道主義の精神が流れ、民衆派のかがけた自由・平等・友愛という合言葉は、ひろい時代的意味とある程度の普遍的共感をよんだ。≫ ≪民衆派の文学はこの時代の気運にささえられ、そうした気運の退潮とともに運動としての意義を失った。作品の完成度の不足はこの流派の文学をしだいに忘れさせる原因となったが、それが近代詩の社会的系譜を代表するひとつの運動であったことは否定できないのである。≫

さらに昭和四十四年、分銅惇作は日夏耿之介の「明治大正詩史」を批判的に継承しながら、次のように書いている。

≪次に民衆詩派の功罪についてであるが、日夏耿之介は「民衆詩人が語彙が貧弱で、思想が幼稚で、あまつさえ、表現の天巧が尠なくて、さればこそ、無暗矢鱈に、弓をつがへた矢の行方を見ず、考へず言葉を汚し、言葉を虐げて、その貧しい思想を、表面的な空気で誤間化してゐた。」（『明治大正文学史』）ときびしく論断を下しているが、民衆詩派の人たちが真正面から対決していったのは、ほかならぬ日夏流の高踏晦渋な詩風で代表される芸術主義の傾向であった。「言葉を虐げて」と言われるならば、虐げられていた言葉を解放したのがわれわれの運動だと開き直るに違いない。「貧しい思想」を指摘されるなら、逆に芸術派の社会的関心の薄さを攻撃するに違いない。というように、一言でいうなら民衆詩運動の方向は反芸術主義の立場であった。≫

分銅はこの後、白秋や三好達治の評価に言及したうえで、民衆詩派を以下のように評価する。≪（前略）ほとんど詩の社会性を考えることのなかった詩壇に、民衆詩派が導入した社会性の問題は、かれらの詩的成果はさておいて、やはり大きく評価されなければならないであろう。≫

それではかれらの詩的成果はどうか。それについては、次のようになかなかに手厳しい。

≪この派の到着した詩的水準の低さ、その魅力のなさは、主として明確な近代詩論を持ち合わせなかったことに負う。デモクラシーの思想的な新しさに甘えかかって、詩的方法論については無自覚であった。ポエジーとポエムの区別もつかぬ素朴な詩論から抜け出すことができなかった。即物的・実感的な感動を歌いあげるのみで、詩の表現的機能―リズムやイメージを生かした詩のきびしい形象化を追求することができなかったのである。したがって、「民衆」ということばの鮮度が落ちるにつれて、この派の衰退は必然的なものであったと言えよう。[6]≫

民衆詩派と福田正夫とは必ずしも一つではない。しかし、福田正夫は民衆詩派の詩人の一人である。従ってこれまで展望してきた批評も、

その点を読み分ける必要がある。が、あえてその点には触れなかった。

二

昭和四年四月十五日発行の『現代日本文学全集37』（改造社）は、「現代日本詩集・現代日本漢詩集」の巻である。両者に序が添えられている。その前者の序を見ると、そこには次のようなことが書かれている。

『現代日本詩集』は、明治誕生期より大正に至る、詩史に輝ける詩人の詩業を、宗派的狭心を捨てて集成し、時代を序うて体系づけ、鳥瞰的全景を通覧せしむべき意図のもとに編纂された。

従って、一方、史的の事実を重んずると同時に、他方、現今の評価に堪へ得る佳品を採録し、この二点の良き統一を求めた。

現存詩人にあっては、殆ど、その快心の作を各々の自選に俟った。

（略）

各作家の人選は慎重に慎重なる考慮を費した。又、配列の順序はもとより年次的である。

福田正夫の詩は白鳥省吾や百田宗治より多い十四篇が納められている。[7] 右の「序」によれば、いずれも福田自身の選によるものだということになる。

『農民の言葉』（詩集、以下同じ）
「夏まつり」（詩、以下同じ）
『船出の歌』
「明るき虚無者」「鴎」
『耕人の手』
「大空への思慕」「地と空の交霊」「落葉樹」
『福田正夫詩集　一　種播く者』
「石工の歌」「小さい戦士」
『福田正夫詩集　三　ペンの農夫』
「炎の花」「錆びた嬰児」「地を翔けり行く星々」
『福田正夫詩集　四　われら自らの戦ひのために』
「光の銅鑼」「陽だまり」
『抒情小曲集　―　海の瞳』
「月かかりて空に」

詩人の蒲生直英が、右の全集で福田正夫詩に出会ったと、「福田正夫の詩・断想」[8] に書いている。そこに引用している「小さい戦士」という詩を、参考までに掲げておこう。

子供よ、小鍬を肩に、
君も働いて来たか、
うれしさうにいそいそと、夕餉にかへるのか、
赤い頬、黒い手、
あゝ、君は人生の小さい戦士だ。

昭和四十八年十月二十日に刊行された『日本近代文学大系54』（角川書店）は、「近代詩集Ⅱ」と題されて、≪主として大正期にその業績を残した詩人の作品を納めた≫（凡例）一冊となっている。木下杢太郎から村山槐多まで十八人の詩人の作品が注を付して掲載されている。その中で福田正夫の詩は最も少なくて、次の三篇だけである。

『世界の魂』
「民衆の国」「世界の魂」

『船出の歌』
「一つの列車とハンカチ」

ここに収められた詩は、いずれも民衆詩派の詩人に相応しい主題の詩ばかりである。巻頭の解説が壺井繁治、注釈が角田敏郎で詩の選者が判然としないが、おそらくそのような観点から選択されたものであろう。福田自身の選んだ先の十四篇と重なるものが、一篇もないのは興味深いことである。

昭和五十年二月二十八日に発行された『日本現代詩大系』第六巻（河出書房新社）には、福田正夫の詩が八篇採録されている。

『船出の歌』
「人々と共に進む」「一つの列車とハンケチ」
『海の瞳』
「この石一つ」「苦しい肯定」「働いている子供の手」
『耕人の手』
「若者と低能児」「小作人」「田園の夕」

これらの詩を選択編纂したのは、巻末の解説によると三好達治と思われる。そう思って読むと、

この石一つ、
一昨日三人
けふ一人 ——
ああ、一人は死に、
三人は働き、
掘り出されたのかこの石一つ。
（この石一つ）

という詩句や、あるいは、

村々に灯が見えそめ、
日はしづかに昏れて行く夕、
一人の老父は石に腰うちかけて、
とほい山々の寂しい風景と、
つめたい風の行く野を眺める。
（田園の夕）

という叙景に、選者の好みが反映しているように思われる。そしてここにも、自選十四篇と重なる詩は一篇もない。ただ、「一つの列車とハンカチ」一篇が、『日本近代文学大系54』所収のそれと重なっていた。この詩に表出するものが感情ではなく、批判精神であることによって、この詩を現代詩たらしめているからであろう。その詩は左のような詩である。

一つの列車が、
わっと魂ぎる様に万歳をわめきながら、
西伯利亜出征の兵士をのせて、
通過して行く瞬間 ——。

窓から争ふ様にふるハンケチ、
沿道の人々は呆然として見送る、
一人の老いた車夫だけが、
万歳と叫んだ、帽をふった。

私の魂はまづ驚く、
何といふ悲壮だ、

まるでやけの様に呼ばはる彼らの叫喚、
死にに行くのだ、死にに行くのだ、
なんといふ国民的の悲劇だ。

私は自ら流れて来る感激に、
思はずも愴然として粟だち、
ついで来たものは満眼の涙であった、
ああ卿等よ、私は万歳を叫ぶにはあまりに凡てを知りすぎてゐる、
許せ、私は涙を以て卿等を送る。

昭和五十一年五月十日発行の『日本の詩歌26』（中央公論社）は、文庫本である。それ以前に出版されたものを、そのまま文庫本にしたものであるから、その初出は年代がもっと古いはずである。それと相前後して出版された『日本詩人全集32』（昭44、新潮社）は「明治・大正詩集」であるが、その中に福田正夫の名はない。編者は清岡卓行である。それに反して、「近代詩集」と題された前者には、福田正夫の詩が三篇収められている。

『船出の歌』
「一つの列車とハンケチ」
『耕人の手』
「青ざめた田舎」
『福田正夫詩集　一　種播く者』
「石工の歌」

ここにきて詩人自身の自選と重なる詩「石工の歌」が出てきた。「一つの列車とハンケチ」は、前二者とも重複している。選者は伊藤信吉に違いない。「解説」に《ひろい意味での近代詩という見地において、本巻には明治新体詩の昔から、昭和年代にいたるまでの六十三詩人の作品を収録した。》と書いているのだから。

先に触れた『日本詩人全集』のように、福田正夫の名が次第に忘れられていく。そこで小田原生まれの福田を蘇生させようと、昭和四十七年三月、小田原市立図書館が『福田正夫－追想と資料』を作成した。昭和五十五年十一月十五日には、『追想・福田正夫－詩と生涯』（冬至書房新社）が詩人金子秀夫・福田美鈴夫妻の手で出版された。その巻頭に、金子の選んだ詩が「福田正夫詩抄二十五篇」と題して掲載されている。

『農民の言葉』
「しちめん様のまつり」「四十男の縊死」
『世界の魂』
「郷土の歌」
『船出の歌』
「悲しき労働」「一つの列車とハンケチ」
『ペンの農夫』
「ペンの農夫」「北の港」「足音」「激動」「母性」
『光の花輪』
「断崖」「一銭銅貨一つ」
『種播く者』
「秋の夕の歌」「光ある国」「郊外の家」
「石工の歌」「農村の夕暮」
『われ自らの戦ひのために』
「窓の辺（ほとり）にて」
『耕人の手』
「浜辺」
『孤独な登高者』
「小さい家」「心象風景」「風の卵」「白い花」
「薄明の章」「詩心」

金子は以上の詩を選択した基準について、《ぼくは自分がいいと信じた作品を、自分の審美眼と好みで見たてた。では好みとはなんで、自分が良しとしたものはなにか。これを端的に言うと、詩が生き生きと鮮度をもち、自分の胸でひびき、いのちの波動を伝える魂のリアリティをもっているか、否か、これできめた。》と述べている。「一つの列車とハンケチ」「石工の歌」以外に、これまで見てきた詩と重なるものはない。《他の詩人が別に福田正夫詩抄二十五篇を編むとしたら、当然、異なる詩二十五篇が選別されることになっても、なんら不思議がることはないのだ。》と金子自身が言っているが、まさにその通りであろう。ただ、言えることは、このようにして優れた作品を選ぶことが、それまでの福田正夫詩の批判に応えることになるのだ、ということである。そのために便利な『福田正夫全詩集』が教育出版センターから発行されたのは、昭和五十九年一月一日のことであった。その五三七ページに「画」という詩が載っていた。大岡信は同年二月五日の『朝日新聞』「折々のうた」の欄にその詩を取り上げて、次のように紹介した。

一人の人が、
海ぞひの路をすたすた行く、
すたすたと、
何と微妙な画だ。

福田正夫

『福田正夫全詩集』（昭五九）所収。明治二十六年小田原市生まれ、昭和二十七年没の詩人。大正中期以降、詩誌「民衆」に集まったいわゆる民衆詩派の中心だった。「画」と題する短詩。海辺の何気ない情景である。すたすた行く人は軽やかだ。その軽やかさそのものを一編の詩にすくいとる。それも面白い。そういう目でながめてみると、最後の行がまさに微妙に生きていることに気づかされる。

この年六月三十日には、福田美鈴の編んだ福田正夫詩集『星の輝く海』が「ジュニアポエム双書」の一冊として、教育出版センターから刊行された。これは「星の輝く海」「夢の唄」「太陽と春」の三部構成となっており、福田正夫の詩三十六篇が収められている。福田美鈴の手によって、民衆詩派のレッテルを注意深く取り除くように構成されている。それはまた、福田正夫自身の晩年の願いでもあった。[9]

昭和六十二年五月二十五日に発行された『焔―詩とエッセイ一九八七』（福田正夫詩の会編・教育企画発行）には、巻末に「福田正夫作品集」が置かれ、福田美鈴が解説している。そこには以下の詩が収められている。

『農民の言葉』
「加瀬の山から」「農民の言葉」
『世界の魂』
「魂の帆の歌」「民衆の国」
『船出の歌』
「雨が降る」「悲しき労働」「一つの列車とハンケチ」
『耕人の手』
「青ざめた田舎」「麦踏む二人」「深淵」
『種播く者』
「太陽と春」「小さい戦士」「労働前の人々」
『光の花輪』
「一銭銅貨一つ」「泉」「森林に燃える夕日」
『ペンの農夫』
「ペンの農夫」「寂しい帆船」「足音」「母性」「蟻」
「都会の花」「春」
『われ自らの戦いのために』

「悪の踊り子」「窓の辺(ほとり)にて」「光の銅羅」
以上の詩集の他に雑誌『焔』から
「氾濫」「俺の十二時」「豹」
が採られていた。ここに詩を採録したのは福田美鈴であるが、これまで展望してきた詩と重複するのは、正夫自選詩では「小さい戦士」「光の銅羅」、『日本近代文学大系54』では「民衆の国」「一つの列車とハンケチ」、『日本現代詩大系』第六巻では「一つの列車とハンケチ」、『日本の詩歌26』では「一つの列車とハンケチ」「青ざめた田舎」金子秀夫選では「悲しい労働」「一つの列車とハンケチ」「一銭銅貨一つ」「ペンの農夫」「足音」「母性」「窓の辺にて」であった。

このように比較してみると、「一つの列車とハンケチ」が一番票が多いことが分かって興味深い。なお福田美鈴の選には洩れてしまったが、「石工の歌」も正夫自選、『日本の詩歌26』、金子選にいずれも顔を見せていた。

今後福田正夫がどのように評価され受容されていくかは全く予測がつかない。だが全詩集が刊行され、『追想・福田正夫』『資料・福田正夫』が刊行されたのを契機に、文学史の上で見直しがなされていくのではないか、と思っている。

〈注〉

(1) ユーカリ編集部編『追想・福田正夫—詩と生涯』(昭55・11・15 冬至書房新社)の一一三ページ。

(2) 西条嫩子「新奇な詩人 正夫氏」(福田正夫詩の会編『資料・福田正夫—人間と芸術』昭60・1・24 教育出版センター)の四七〜四八ページ。

(3) 日夏耿之介『改訂増補明治大正詩史』巻ノ下(昭46・10・15 四版・東京創元社)による。以下の引用は六八ページ、九六ページの頭注、および九六ページ、一八〇ページの本文。

(4) 手元に『早稲田文学』(大正五年二月号)が無いので、福田正夫詩の会編『資料・福田正夫—人間と芸術』(昭60・1・24 教育出版センター)の一七七ページより引用した。

(5) 「日本現代詩大系第六巻月報」(昭50・2 河出書房新社)ここには≪昭和二十六年三月刊行の旧月報の原稿を採録したものです≫という但し書きがあって、それが二十六年に書かれたものと分かる。

(6) 分銅惇作「民衆詩派」(『国文学解釈と鑑賞』昭和四十四年八月号・至文堂)

(7) ただし、ページの割当はいずれも同じ五ページである。

(8) 『焔』第20号(一九九〇年八月三十日福田正夫詩の会発行)の八〇ページ。

(9) 福田美鈴「〝ポエジーと芸〟からの喚起」(『日本未来派』一六八号 昭50・11・20発行)に≪父は民衆詩を、口語自由詩がようやく盛んになり始めた大正一時期の、過渡期のものだと言い、民衆詩も民衆詩運動も当代の仕事として終わったのだと言った。戦後、若い人が民衆詩的作品を書いてくると、こういう作品を書く仕事はすでに自分たちがやった。こういうものを書く時代もとうの昔に通り越した。現代の詩人は、現代の目で時代をとらえ、新しいものを求めなくてはいけない、過去を踏台にして未来にはばたけ、とさとした。父の作品自体が変化の歴史を辿った。≫というところがあって、そのことを示している。

— 平成二年十月一日 受理 —

(本学教授・国文学)